

小 中 合 同

平成 2 5 年度

教育研究員研究報告書

教育課題

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	小学校分科会	1
	i 分科会副主題設定の理由	1
	ii 研究の方法	2
	iii 研究構想図	5
	iv 研究の内容	6
	v 実践事例	9
	vi 成果と課題	13
III	中学校分科会	14
	i 分科会副主題設定の理由	14
	ii 研究仮説	14
	iii 研究構想図	15
	iv 研究の方法	16
	v 研究の内容	16
	vi 効果検証と本研究からの提言	22
	vii 研究のまとめと今後の課題	24
IV	両分科会の研究を通して	24

研究主題

人が育つコミュニケーションの充実を目指して

分科会副主題

(小学校) 若手教員育成のための効果的なOJTの在り方

(中学校) 人間関係を豊かにするコミュニケーション能力を育てる指導方法の工夫

I 研究主題設定の理由

21世紀は、「知識基盤社会」の時代であるとともに、グローバル化が一層進展することにより、「多文化共生社会」の時代になるともいわれている。こうした時代を生きる児童・生徒には、これまでも求められてきた「生きる力」がより一層求められることが、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（平成20年1月）」においても強調された。本答申においては、「生きる力」の育成に関わる、思考力・判断力・表現力等、学習意欲、学習習慣・生活習慣、自分への自信や自らの将来についての関心、体力などに課題があるとの指摘がなされ、現行の学習指導要領への改訂につながった。改訂された現行の学習指導要領の理念を実現していくためには、指導方法の工夫・改善を図るとともに、指導を行う教員の資質向上を図ることが不可欠である。

本部会では、思考力・判断力・表現力等の伸長を図るための言語活動の充実に関わる指導方法の工夫と今後の増加していくことが見込まれる若手教員の組織的な育成に焦点を当て、研究に取り組むことにした。

これらはコミュニケーションが基盤となることから、小・中学校両分科会共通の研究主題を「人が育つコミュニケーションの充実を目指して」とした。この共通研究主題を基盤に、小学校分科会は、教員間のコミュニケーションに着目し、副主題を「若手教員育成のための効果的なOJTの在り方」と設定した。また、中学校分科会は、生徒間のコミュニケーションに着目し、副主題を「人間関係を豊かにするコミュニケーション能力を育てる指導方法の工夫」と設定した。

II 小学校分科会

i 分科会副主題設定の理由

若手教員育成のための効果的なOJTの在り方

現在、東京都の各学校においては、教員の大量退職・大量採用が本格化し、初任者等若手教員が増加する傾向が続いている。さらに、社会状況の変化に伴い多様化・複雑化する様々な教育課題に的確に対応することのできる教員を育成するため、初任者研修はもとより各学校で行われる人材育成について、改めて考え、構築していくことが必要であると考えた。

経験の浅い若手教員の育成に当たっては、東京都教員人材育成基本方針やOJTガイドラインに示されている、「教員が身に付けるべき力」を念頭に置き、これまでの各学校での取組の状況や課題等を検証し、より効果の高い若手教員育成の手立てを組織的に構築していくことが必要である。現在、OJTは各学校で行われているが、その推進状況には差異がある。また、若手教員育成に関しては、特定の指導教員の力量に頼る場面も少なくなく、経験豊かな他の教員が有効活用されていない現状もある。したがって、学校組織全体で若手教員育成に携わり、実

践的指導力やコミュニケーション力、学級経営や保護者との関係、職場での人間関係、組織として対応する力など、教員としての基礎的な力を身に付けさせることが求められていることから、副主題を「若手教員育成のための効果的なO J Tの在り方」と設定した。

ii 研究の方法

1 基礎研究(O J Tの推進状況について)

はじめに、部員の所属校におけるO J Tの推進状況について話し合った。すると、若手教員の指導力向上に向けた取組を進める上での共通の課題が浮き彫りとなった。教員の年齢構成、学校規模、O J Tの実施頻度などは様々であり、若手教員の育成状況にも差異があり、指導力に違いが生じているようであった。そこで、O J Tに関わる現状や課題を把握するために、若手教員が自己の課題として捉えていることや、職務上の悩み、また、管理職から見た若手教員の育成上の課題などに関するアンケート調査を実施した。

2 調査研究

(1) 調査の目的

若手教員と管理職・主幹教諭を対象とするアンケート調査を実施し、若手教員へのO J Tの現状を把握・分析し、本年度の研究を進める手がかりとする。

(2) 調査の方法

ア 調査期間	平成25年7月
イ 調査方法	質問紙法による。
ウ 調査対象と対象者数	・ 研究員所属地域の若手教員（1～3年次） 184名 ・ 研究員所属地域の校長・副校長・主幹教諭 145名

(3) 調査項目

ア 若手教員対象

(ア) 困っていたり悩んでいたりにすることについて

学習指導について……………19項目	生活指導について… 9項目
保護者・地域について… 7項目	その他……………12項目

(イ) 自分の資質・能力向上のために求めることについて

学習指導について……………13項目	生活指導について…14項目
保護者・地域について… 4項目	その他…………… 9項目

イ 管理職対象

職務に関すること…………… 6項目	資質・能力に関すること…9項目
-------------------	-----------------

(4) 調査結果(上位3項目のみ抜粋)

ア 若手教員対象アンケート結果>

(ア) 困っていたり悩んでいたりにすること

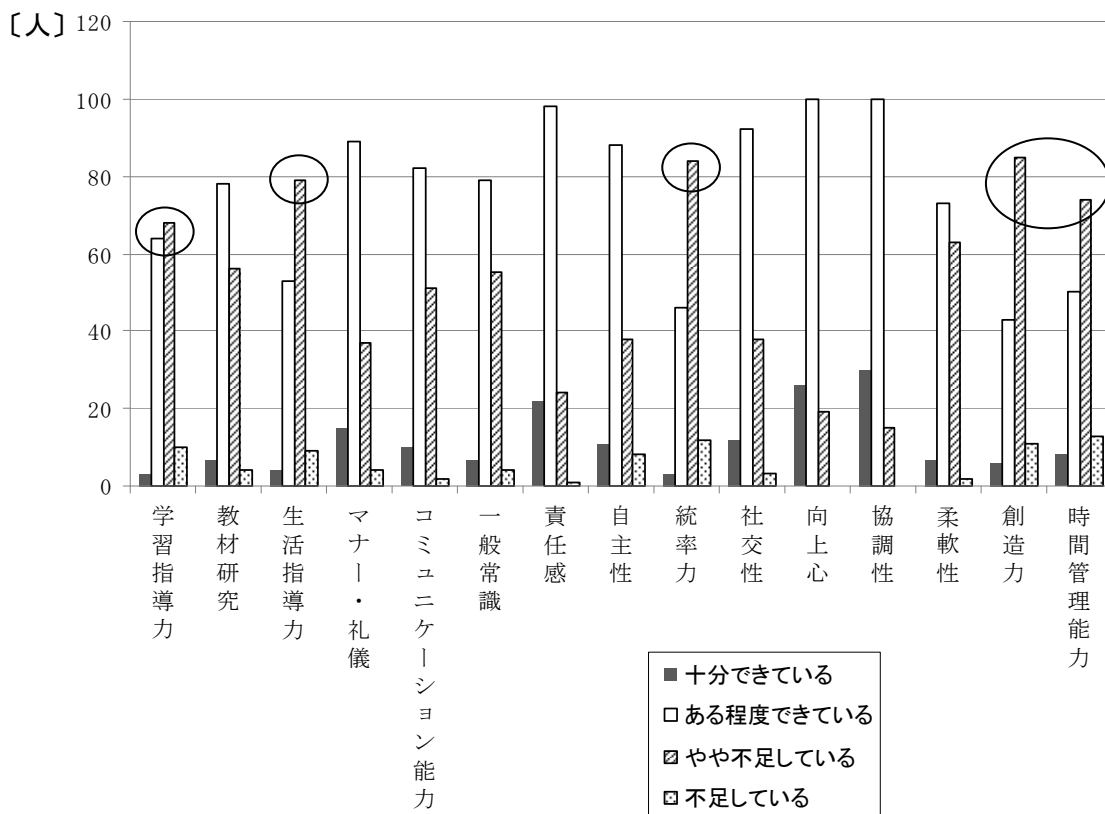
【学習指導について】	1 授業中の発問がうまくできない	61%
	2 苦手な授業がある	50%
	3 授業準備(教材研究)をする時間がない	48%

【生活指導について】	1 指導に自信がない	44%
	2 トラブルが起きたときの対応が分からない	23%
	3 整理整頓の仕方が分からない	19%
【保護者・地域について】	1 トラブルが起きたときの保護者への連絡が苦手	36%
	2 保護者との電話での対応が苦手	21%
	3 保護者からの要求や要望の対応が分からない	17%

(イ) 自分の資質・能力向上のために求めること

【学習指導について】	1 経験豊富な教員の授業が見たい	74%
	2 研究授業をたくさん見たい	57%
	3 教材研究の方法を教えてもらいたい	55%
	3 教材研究のための時間がほしい	55%
【生活指導について】	1 経験豊富な教員のトラブルへの対応が見たい	59%
	2 クラスのルールについて教えてほしい	34%
	3 先輩教諭や指導教諭にトラブルを解決する方法を 教えてもらいたい	31%
【保護者・地域について】	1 校内の先生方の保護者への対応が見たい	42%
	2 保護者からの要望等への対応を教えてもらいたい	31%
	3 保護者との電話での対応方法を教えてもらいたい	27%

イ 管理職対象アンケート結果



(5) 分析と考察

以上のアンケート結果を基に、若手教員と管理職のニーズを以下のように分析した。

ア 若手教員対象アンケートより

(ア) 困っていたり悩んでいたこと

【学習指導について】

授業を思うように展開することができないが、授業準備（教材研究）をする時間がとれない。

【生活指導について】

トラブルが起きた時、叱るべきか、話を詳しく聞くべきかなど、状況に応じてどのように指導したらよいか分からない。

【保護者・地域について】

電話や連絡帳などを通しての間接的な保護者への対応ならびに、面談などの直接的な保護者への対応の仕方が分からない。

(イ) 自分の資質・能力向上のために求めること

【学習指導について】

経験豊富な先輩教員の下で、模範授業を参観したり、校内外を問わず研究授業を積極的に参観したりしたい。

【生活指導について】

具体的な場面で、自分の指導を経験豊富な先輩教員に立ち会ってもらったり、実際の指導場面を見学したりしたい。

【保護者・地域について】

経験豊富な先輩教員や他の教員の保護者への対応方法を、実例を基に教えてもらいたい。

イ 管理職対象アンケートより

学習指導力・生活指導力を両輪にしつつ、学級経営をしていく上での統率力、授業を創造していく力を伸ばしてほしい。

これらを総括すると以下のとおりである。

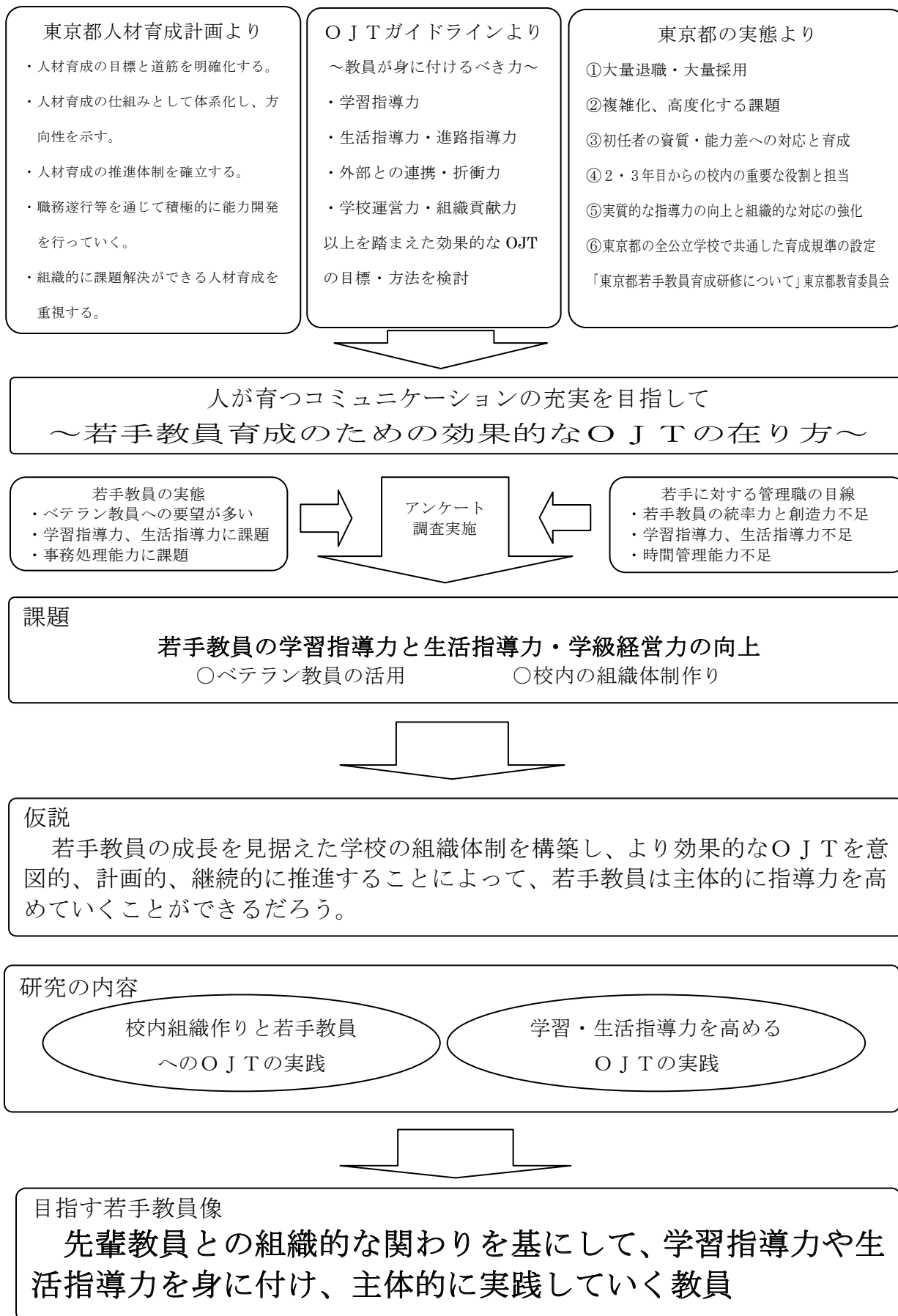
ア 若手教員は経験豊富な先輩教員から幅広く具体的な指導を受けたいと感じている。

イ 若手教員自身、学習指導力・生活指導力に課題を感じている。また、管理職からも同様の結果が出ている。

ウ 若手教員からは時間が足りないという意見が多く、そのため、教材研究や授業観察などが十分に行えないと感じている。

これらの課題を改善するためには、指導教諭だけに若手教員の育成を任せきりにするのではなく、学校全体で組織的に若手教員を育てる体制を整えることが必要である。また、若手教員の学習指導力・生活指導力を向上させるための具体的な取組として、どのようなOJTが効果的であるのかを研究していくこととした。

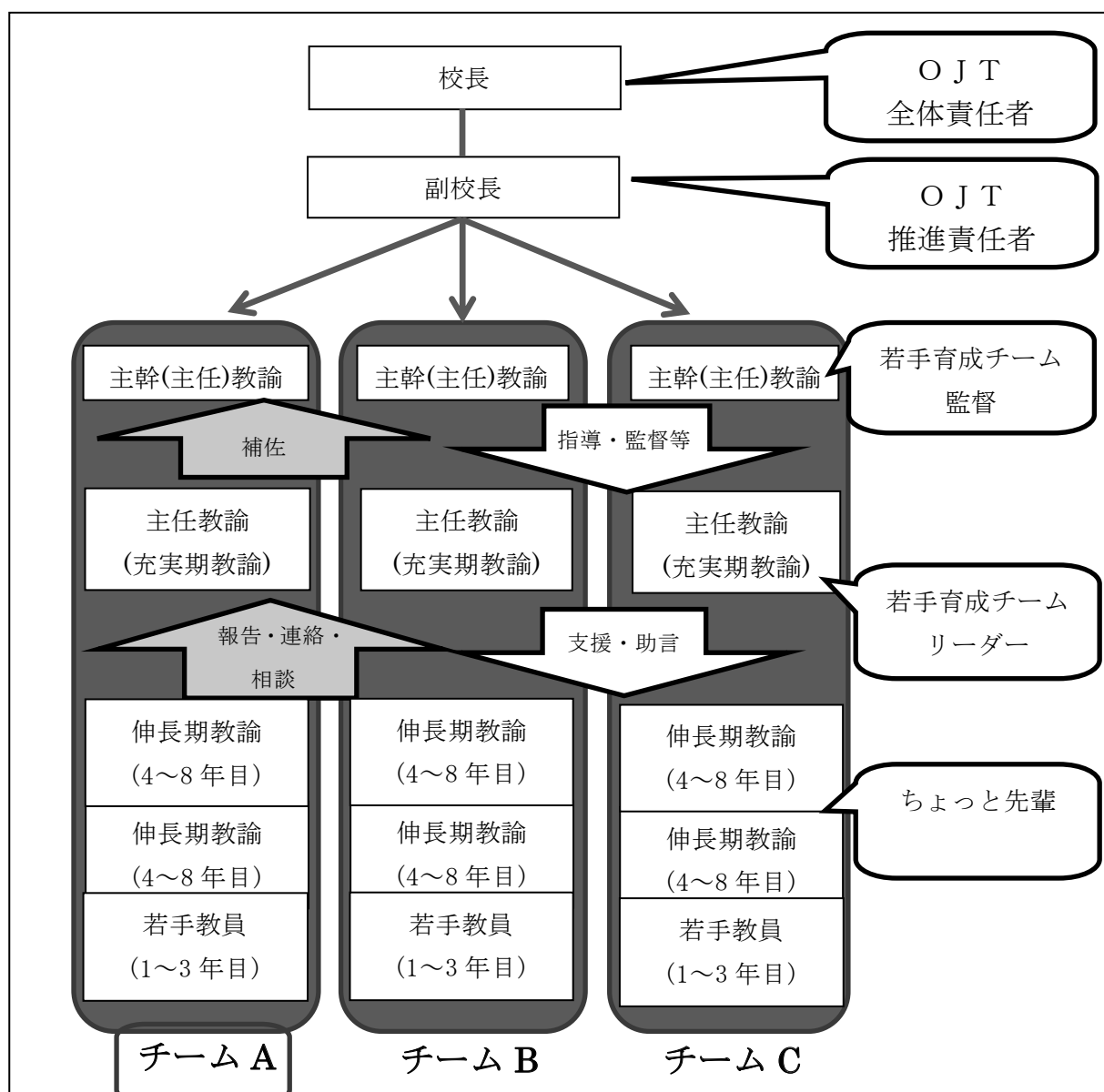
iii 研究構想図



iv 研究の内容

1 若手育成校内組織図（チーム作り）

現在の若手教員育成に関するOJTでは、主に指導教員と若手教員の間で行われることが多く、指導教員の負担が大きい。また、経験豊かな教員を若手教員育成のOJTに活用しにくい。そこで、今回は若手教員に対する新たなOJT体制を提案する。下のようなチームを構成して、経験年数や職層ごとにメンバーを選び(教員の縦割り)、組織的かつ幅広い視点から育成ができるようにした。さらに、受ける側だけではなく、行う側の成長も期待できる。



若手育成チーム

若手教員1~2名ごとに、若手育成チームを1チーム編成し、若手教員の育成を組織的に進める。各チームは4~5名程度となるよう、経験年数や職層ごとにバランスよく構成する。チームは若手育成のための計画を立て、意図的、継続的にOJTを推進する。チームリーダーは研修内容によっては、チーム以外の教諭の協力を要請する。

例 主幹教諭(チーム監督:全体の調整をして副校長に報告)・主任教諭(チームリーダー:学習指導、生活指導を担当)・伸長期教諭(ちょっと先輩:年次が近く、どんなことでも気軽に相談可)・若手教員

※職員数や若手教員の人数等の学校の実態によりチーム編成は柔軟に行う。例えば、3年次の教員を【ちょっと先輩】に配置する等。

2 年間計画案の考え方

アンケート結果から若手教員の意識をつかみ、東京都若手教員育成研修と関連付け、以下を意識して意図的、計画的、継続的に行うことが有効であると考えた。

- ① 段階をおって、若手教員を育成できる。
- ② 新たな研修を設けるのではなく、既存の若手教員育成研修と関連付けることにより、若手教員の負担が増えない。
- ③ 指導する側が見通しをもち、OJTをチームで進められる。

(1) 学習指導力編 基礎形成期（1～3年目まで）に身に付けるべき力

- 児童・生徒の実態に応じた指導計画を立て、授業を行うことができる。
- 教材・教具を工夫し、児童・生徒に興味・関心をもたせる指導ができる。
- 自分の指導の問題点に気付くことができる。
- 他の教員の指導から学び、自分の指導を改善できる。

	1年次	2・3年次
一学期	<p>指導計画を立て、各教科の授業を進める</p> <ul style="list-style-type: none"> ○目標設定 ○学習のきまり <ul style="list-style-type: none"> ・発言の仕方（挙手、ハンドサイン、発表立ち方など） ・持ち物 ・話し方、聞き方 ○単元指導計画の立て方 ○教材の準備の仕方 ○授業観察の仕方（どのような視点で見えるか） ○児童の見取り方（通知表の記入の仕方） 	<p>児童の実態に合わせた指導計画を立て、授業を進める</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学習のきまりの確認、発展 ○児童の実態に合わせた指導計画の作成の仕方 ○年間計画の立て方 ○板書の仕方 ○学習指導要領・意義とねらい
二学期	<p>教材・教具を工夫し、授業を展開する</p> <ul style="list-style-type: none"> ○板書の仕方 ○ICTの活用（デジタルカメラの活用） ○学習指導案の書き方 ○研究授業の実践 ○日常の学習の評価の仕方 ○地域の人材を生かした学習 	<p>自分の指導の改善をする（振り返り）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ICTの活用 ○研究テーマにそった学習指導案の作成 ○体験を効果的に取り入れた授業 ○研究授業の実践（改善した学習指導案の検討）
三学期	<p>自分の課題に気付き、振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ワークシートの作成の仕方 ○学習のきまり（話し合い活動の仕方、言語活動） ○レディネステストの分析 ○ノート指導 	<p>教材・教具を工夫し、関心をもたせる授業ができる</p> <ul style="list-style-type: none"> ○先行研究からの授業実践 ○学力テストの分析と活用 ○言語活動を取り入れた授業作り ○指導と評価の一体化

(2) 生活指導力編 基礎形成期（1～3年目まで）に身に付けるべき力

- 自分の受け持つ範囲の児童・生徒の実態を把握できるとともに、伸ばすべき、個性・能力を見付けることができる。
- 自分の直面する生活指導・進路指導上の問題に気づき、課題としてとらえるとともに、他の教員に相談し解決できる。

	1年次	2・3年次
一学期	<p style="text-align: center;">児童を知る（クラス）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生活指導の実践（クラス）・報告、連絡、相談、確認の在り方 ○健康観察の仕方 ・安全教育 ○教師の一日（朝の会から帰りの会まで） ○給食指導・清掃指導 ○いじめ問題の対応 ○保護者との連携・電話の仕方 ○児童理解（人間関係づくり・トラブル解決） ○不登校児の対応 ○夏季休業中の指導 ○基本的な生活習慣づくり 	<p style="text-align: center;">児童を知る（学年・学校）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童相互の人間関係づくり ○発達段階の理解 ○褒め方・説諭の仕方（信頼関係の構築） ○いじめ・不登校の予防 ○規範意識 ○防災教育 ○情報モラル教育 ○効果的な集団指導
二学期	<p style="text-align: center;">生活指導の実践力を身に付ける（クラス）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教育相談の理解 ○キャリア教育の目的と方法 ○生活目標の設定 ○発達段階と指導・健康の保持・増進 ○集団行動・安全教育（運動会など） ○カウンセリングマインド ○安全指導2 ○冬季休業中の指導 	<p style="text-align: center;">生活指導の実践力を身に付ける（学年・学校）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自尊感情や自己肯定感の育成 ○問題行動の分析と背景理解 ○生活指導上の課題と取組① ○生活指導上の課題と取組②評価 ○キャリア教育の実践
三学期	<p style="text-align: center;">クラスの実態を把握する</p> <ul style="list-style-type: none"> ○道徳・特別活動との関連 ○実態調査と課題の分析 ○進路指導の目的と方法 ○生活指導の現状と課題 ○年度末指導 	<p style="text-align: center;">個々の児童に合わせた生活指導力を身に付ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ○危機管理の校内体制 ○児童虐待への対応 ○特別支援教育

v 実践事例 (東久留米市立第七小学校の場合)

1 若手教員育成のための校内組織編成の考え方

若手教員5名(初任者3名、2年目1名、3年目1名)を、4つのチームに分けてOJTを行うこととした。チームの構成は先に述べたように、各チームの責任者として主幹・主任教諭を置き(チーム監督)、チームリーダーとして主任教諭、もしくは10年経験程度の教諭を配置。さらに伸長期教諭を2～3名を加え、若手教員を含めた5～7名で1チームを編成した。(次頁参照)

なお、チームを編成するに当たり、以下のことを考慮した。

- ① チーム内には必ず指導教諭を含む(必ずしも責任者でなくてもよい)。
- ② 可能な限り、各校務分掌組織の担当がチーム内に存在するようにし、若手教員が全ての分掌について相談・質問等ができるようにした。
- ③ チーム内のメンバーは、担当学年も様々であり各学年の指導法や教材研究などもお互いに学び合えるようにした。
- ④ チーム内ですぐに相談や話し合いができるように、直接のアドバイザーである伸長期教諭と若手教員の職員室での座席の位置も近くなるよう配慮した。

このように、若手教員育成のための校内組織を編成し、各チームで担当した若手教員の実態に合わせたOJTを、計画的、継続的に行うこととした。また、OJTの内容によっては、チーム間での人材活用も各チームの要請により、柔軟に対応し協力することとした。

○チーム内での組織について

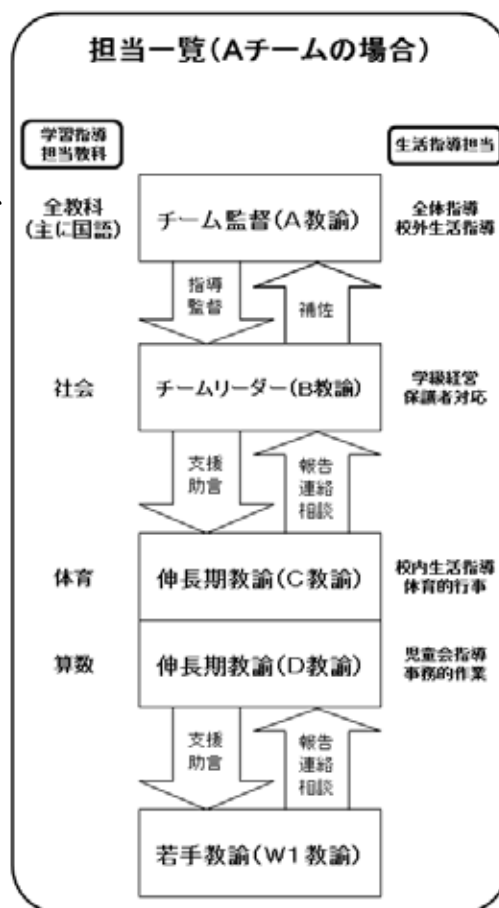
本研究での実践の中心となる、Aチームの場合を例に挙げると、まず、チーム内で若手教員の学習指導力向上に向けた取組と、生活指導力向上に向けた取組について、具体的なOJTを実践していくためのプランを話し合い、チーム内でOJTの担当を決めた。

右の図のように、学習指導力向上に関してはチーム内で、指導教科の担当を決め、その担当教科においては中心的に指導することとした。

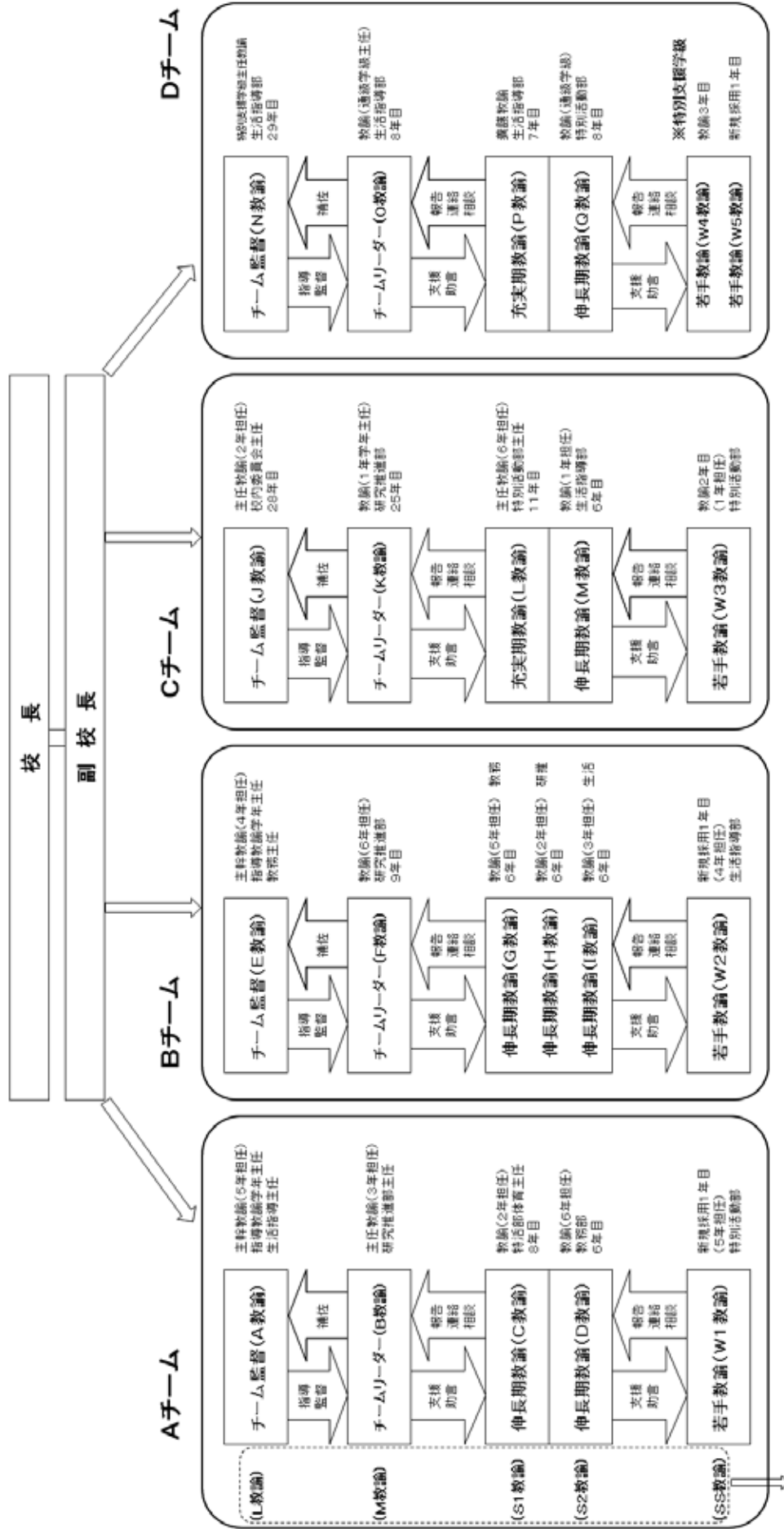
また、生活指導力向上に関しても、同様に担当を決めて若手教員にOJTを行っていくこととした。



チームによる授業後の協議



若手育成OJTモデルチーム構成図 (東久留米第七小学校の場合)



- チーム監督(主任教諭)
 - チームリーダー(主任教諭)
 - 伸長期教諭(4～8年目)
※ 充実期教諭(10年以上)
 - 新採用教諭
- 上記チームは中心的に若手育成に関する組織であり、それ以外の教諭は、チームの要請により随時協力する。
 - 各チームで、若手教員の実態に合わせたOJTを、計画的、継続的に行う。
 - チーム間での人材活用も、状況に応じて柔軟に行う。

2 OJTの実践 (Aチーム W1教諭の場合)

(1) 学習指導力向上のOJT

ア 授業観察 (見てもらう)・授業参観 (見せてもらう) の時間割の設定

若手教員の学級の時間割をもとに、チーム内で担当教科ごとに授業観察と授業参観の可能な時間を調整し設定した。(右図)

観察者	被観察者	月	火	水	木	金
○○ ○○	○○ ○○	月	火	水	木	金
教科	単元名	1/6時				
観察のねらい	他人に似た課題をチームで進んで作る。単元はその単元に似て、多少異なる。指導目標に照らして授業を観る。					
ここ見てポイント	授業力	指導力	授業力	指導力	授業力	指導力
1 授業のねらいが明確か	4	3	2	1		
2 ねらいに沿った展開ができたか	4	3	2	1		
3 特色がわかりやすかったか	4	3	2	1		
4 発問が効果的だったか	4	3	2	1		
5 授業が主体的に展開していたか	4	3	2	1		
6	4	3	2	1		
7	4	3	2	1		

曜日	月	火	水	木	金
時間	全校朝会	朝読書	朝学習	集会	朝学習
8:45					
1	活	理科	算数	国語	国語
2	社会	理科	国語	算数	体育(校庭)
10:20			休み		
10:40	算数	算数	家庭	社会	図工
11:25					
11:30	音楽	国語	家庭	理科	図工
12:15	(給食)				
1:35	体育	社会	体育(校庭)		
2:20	(体育館)				
2:25	国語	外国語		音楽	クラブ委員会
3:10					

は、専科授業のため空き時間

※その他の空き時間は、所属チーム以外の学級の授業参観や、教材研究の時間として活用する。

イ 授業力向上OJTシート (上図) の活用

授業観察の際には、若手教員が毎回負担にならない程度の独自の指導略案を作成し、さらに担当者と相談しながら、その授業についてのねらいや指導のポイント、観察の視点等(診断項目等)を本人の要望を基に作成した授業力向上OJTシートを活用した。

授業観察終了後には、観察した担当者と若手教員は授業について振り返り、反省点や次の課題について話し合いを行った。

ウ OJTノート (右図) の活用

各教科でOJTノートを用意し、授業観察の際に活用した指導略案と、授業力向上OJTシートを授業終了後に、毎回OJTノートに見開きの状態で貼り、保存することで実践の振り返りに活用した。



エ 毎月一回の校内公開授業の実施

実施日や教科等をチーム内で相談し、毎月一回、担当している若手教員の授業を、管理職はもちろん、チーム以外の参観可能な教員に校内公開授業として実施した。授業後には協議会を行った。この校内公開授業での指導案に関しては、指導略案とし、若手教員の負担を軽減した。

(2) 生活指導力向上のOJT

ア 若手教員（新採教員向け）校内研修会の実施

初任者向けの校内研修会として、指導に当たる者として不可欠な要素である、社会人として、教員として、学校組織の一員としての心構えや注意事項についての研修会を実施した。主な内容は以下のとおり。（一部）

- ・挨拶
- ・出退勤
- ・言葉遣い
- ・服装
- ・電話対応
- ・諸会議
- ・礼儀に関して
- ・会食時等の留意点等

イ 報告・連絡・相談（ホウ・レン・ソウ）の徹底

毎日必ず、その日の出来事を報告するのはもちろん、何か起きた時にはすぐに報告・連絡することの重要性を指導し、単独での判断を避けるようにした。また、けがの対応や、連絡帳や電話による保護者からの連絡については、特に、早急の報告・連絡をするように指導した。

ウ 保護者との電話対応のOJT

他の教員が何らかのトラブルにより保護者と電話で対応している場合に、その対応の様子を若手教員に聞かせた。実際に保護者と電話で話している教員のすぐ横で、話し方や、言葉遣い、説明の仕方など、メモを取りながら聞かせることで、より実践に近い経験をさせた。

エ 生活指導の場へ記録係として同席

他の学級で起きた何らかのトラブルに関わる生活指導の場に、若手教員を記録係として同席させた。場合によっては、保護者同伴での指導の際も同様にした。先輩教員の指導を見ることで、児童への指導の流れ、話し方、保護者対応等、実践的な経験を積ませた。

オ 事務作業・書類作成の担当者としてのOJT

チーム内の担当教諭の指導、協力の下、「校外学習実施届」「実施報告書」など、過度の負担にならない範囲で、書類作成の担当者として作業させることで、事務的な業務を覚えさせた。また、教材発注の方法や事務手続などに関しても可能な範囲で指導した。



カ 学年活動や行事での責任者としてのOJT

球技大会や行事等の学年活動をする場合に、学年主任ではなく若手教員に責任者として全体を指揮する役割を与えることで、学級経営だけでなく学年全体の指導力を身に付けさせた。また、運動会などの大きな行事においては、全校種目の責任者として全児童の前に立ち、指揮をとらせた。

どちらの場合においても、若手教員にとって過度な不安やストレスにならないよう、チーム内に過去に担当した経験のある先輩教諭を配置するなど、相談しながら職務を遂行できるような環境にするよう配慮した。

vi 成果（○）と課題（▲）

1 若手教員育成のための校内組織作り

- 若手を育成するという意識が学校全体に浸透した。これをきっかけに学年にとどまらないコミュニケーションが活発になり、職員同士の結びつきが深まった。
- チームを組織したことで、若手教員が、指導教諭だけでなく、伸長期・充実期教員にも様々なことを気軽に相談しやすくなった。
- 学年間を超えたつながりを生み出し、幅広い育成ができるようになった。指導教諭の負担を減らすことができた。
- リーダーを中心に、計画的・組織的に育成を進めていくことで、若手教員のみならず伸長期・充実期教員も指導力・授業力を高めていくことにつながった。（相乗効果）
- チームを組織し、担当者が複数存在することで、若手教員が安心感をもって職務を行えるようになった。
- ▲ チームによって取組に対する差が少なからず生じてしまう。年度当初から組織の動かし方などについての共通理解をしていく必要がある。
- ▲ この研究を実践するためには、中心となる主幹教諭・主任教諭による若手育成・組織作りへの意識を高めていくことが重要である。

2 若手教員の学習指導力・生活指導力・学級経営力の向上のためのOJT

- OJTシートや独自の指導略案を活用することで、若手教師が見通しをもって学習指導をすることができるようになった。
- 1年次だけでなく2・3年次の教員に対しても継続的な育成が可能となった。
- OJTシートを活用することにより、若手教員がより実践的な課題を把握することができるようになった。また、若手教員自身が自己の指導に対して振り返りをするようになり、次への課題抽出や目標設定ができるようになった。
- 学習指導力・生活指導力育成のための年間指導計画を作成することにより、育成する側が見通しをもって指導することができた。
- 保護者対応の場に記録係として同席するなどの実践的なOJTを行うことで、生活指導力を高めることができた。
- 若手教員が、生活指導に必要な、複数の具体的な手立てを知ることで、実践に生かすことができるようになった。
- 若手教員が、チームのバックアップを受けながら行事や学年活動等で中心的な役割を担うことで、責任のある仕事を進めるためのスキルを身に付けることができた。
- 若手教員がそれまで気付かなかった自らの新たな課題を知ることができ、改善に向けた取組を行うことができた。
- ▲ 様々な校務に取り組む中、OJTを実施する時間の設定が難しい。チームのメンバー間で日常的に情報を交換し、時間を捻出していく必要がある。
- ▲ 実践的なOJTを行っていくために、普段から学校全体で若手を育てようという職員の意識を高めていく必要がある。

Ⅲ 中学校分科会

i 分科会副主題設定の理由

人間関係を豊かにするコミュニケーション能力を育てる指導方法の工夫

平成20年の中央教育審議会答申では「言語は知的活動（論理や思考）だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤である」と述べられている。それを受けて、学習指導要領では、「生きる力」を育むという理念の下、知識や技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力などの育成が重視されている。これらの能力を発揮して、互いの思いや願いを理解し合い、異なる意見への理解が得られるように説得したり、互いの意見のよさを生かし、合意形成したりすることが、これから求められる「生きる力」の一つであると考えられる。

しかしながら、自分の感情や思いを表現したり、他者の気持ちを受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが原因の一つとなり、コミュニケーションがうまくいかなかったり、キレてしまったりする子供が増えている。平成20年の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、このような人間関係に不安を抱えている子供たちの現状を踏まえて、「言語の能力を重視し、他者や社会との関わりの中で、子供たちの自信をもたせることが必要である」とし、言語活動の充実が示されている。そして、討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりするなどを重視する必要があるとしている。

学習指導要領では、これらの考え方が反映され、言語が知的活動（論理や思考）の基盤であるだけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であることと相まって、言語活動を充実することによって、コミュニケーションに関する能力や感性を育んだり、情緒を養ったりすることも期待されている。

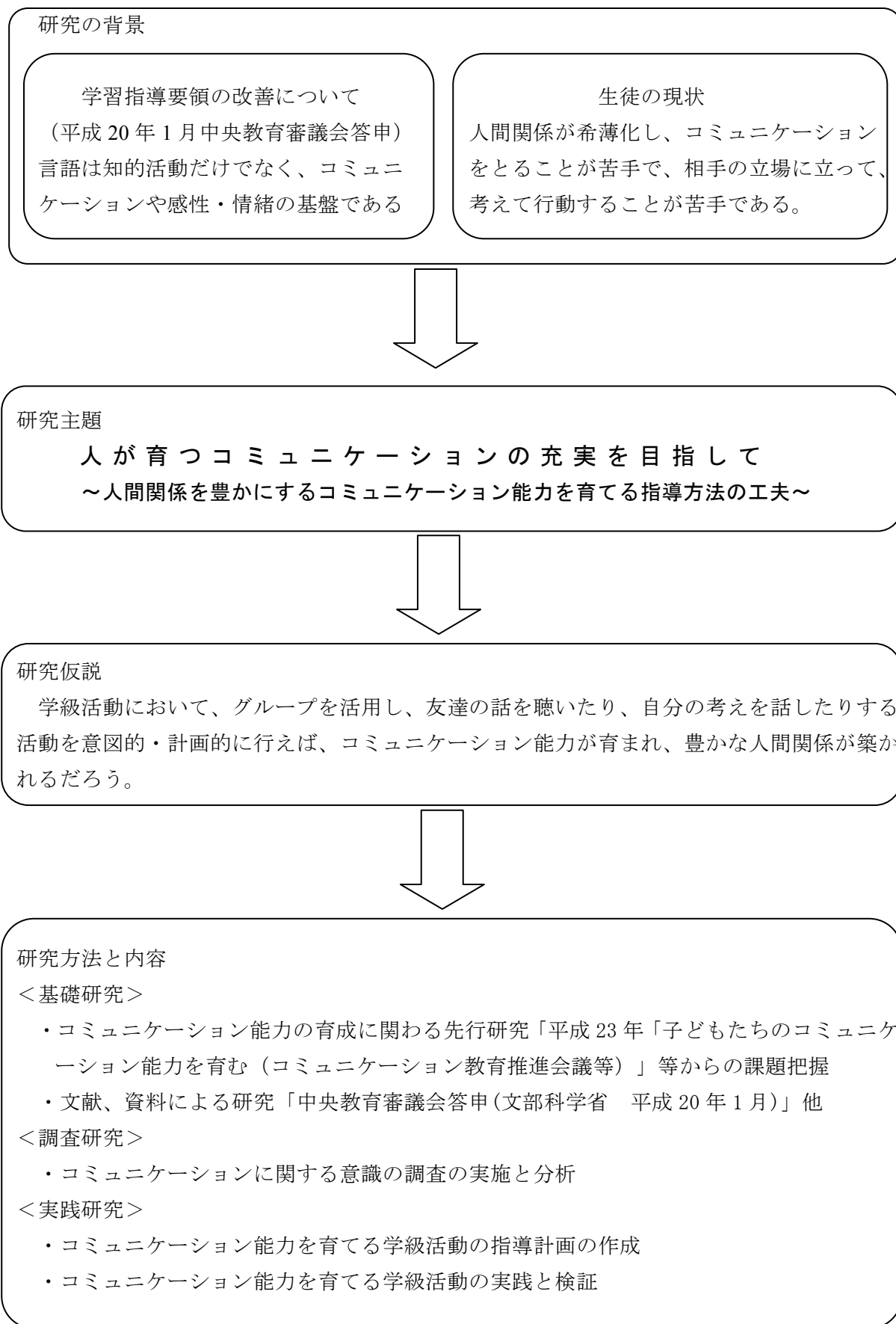
そこで、本研究では、話し合い活動の充実を図ることにより、感性・情緒、知的活動の基盤である言語の能力の伸長を目指した。そのことにより、コミュニケーションに関する能力が育まれ、子供たちが自分への自信をもち、他者との関わりを深め、豊かな人間関係が築かれるだろうと考え、本研究主題を設定した。

ii 研究仮説

学校の基礎的生活の場である学級において、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる学習活動を行えば、思考力・判断力・表現力等が育まれるとともに、言語力の育成が図られると考えた。そして、そのことにより、子供たちが自己肯定感を高め、自分への自信をもつようになり、人間関係が豊かになるだろうと予想した。

そこで、「学級活動において、グループを活用し、友達の話や話を聴いたり、自分の考えを話したりする言語活動を意図的・計画的に行えば、コミュニケーション能力が育まれ、豊かな人間関係が築かれるだろう」という研究仮説を設定した。

iii 研究構想図



iv 研究の方法

より良い生活や人間関係を築くためには、自分や他者の思いや考えを表現したり、受け止めたりして、互いに理解し合うといったコミュニケーションが不可欠である。また、良好なコミュニケーションを図るためには、思いや考えを表現するための語彙を豊かにし、表現力を身に付けることが必要である。そこで、本分科会では、望ましい人間関係を育む学級活動において、意図的・計画的に、互いの考えを伝え合って、自らの考えや集団の考えを発展させる活動を工夫することで、コミュニケーションに関する能力を向上させ、豊かな人間関係を築いていくことを大きなねらいとする。このねらいに迫るために、生徒のコミュニケーションに関する意識がどう育まれているかを把握するために実態調査を実施する。次に、人間関係を豊かにするコミュニケーションに関する能力を育てる指導方法の工夫を実践し、それを検証することにより、本研究のねらいに迫ることとする。研究の主な方法については、次の通りである。

1 調査研究により生徒のコミュニケーションに関する意識を明らかにする。

コミュニケーションに関する意識についての調査を、部員の所属校の生徒を対象に行う。これらを集計、分析することで、コミュニケーションに関する課題を把握し、研究のねらいに迫る。

2 コミュニケーションに関する能力を育む学級活動の年間指導計画例を作成する。

学級活動を実践するに当たり、学校行事や生徒会活動などに関連させて良好なコミュニケーションを図ることができるように、指導計画例を作成した。

3 コミュニケーションに関する能力を育む学級活動の検証授業を行う。

部員が所属する学校で、コミュニケーションに関する能力を育む学級活動の検証授業に取り組み、その成果を分析する。

4 質問紙による効果検証を行う。

コミュニケーションに関する意識の調査を、生徒を対象に行う。検証授業で生徒の意識がどのように変化したか、効果検証を行う。

v 研究の内容

1 基礎研究

人間関係を豊かにするコミュニケーションに関する能力を育むためには、言語活動を充実した学習活動の推進が図られなければならないと本研究では考えた。本研究では、平成23年コミュニケーション教育推進会議の報告を受け、「コミュニケーションに関する能力」とは、「相手の話を聴き、話を理解することができ、相手の立場に立って考え、行動することができる力」と「自分の考えに理由をもち、適切に表現することができる力」と定義した。

また、より良い人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度を育むために少人数のグループ活動を取り入れ、グループの構成人数については、グループへの参加意識が高まり、発言しやすい4人グループの活動を取り入れることとした。

2 調査研究

(1) 調査の概要

生徒が少人数のグループの活動において、コミュニケーションに関する意識をどの程度もっているのか、実態調査を行った。調査は部員所属校の一学年から三学年まで生徒647名を対象に5月に実施した。

(2) 調査結果の分析と傾向及び考察

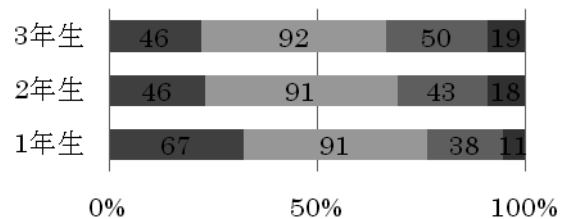
設問1の集計結果からは、各学年とも、少人数のグループ活動を取り入れた学級活動では、一斉活動の時よりも興味・関心が高まっている。

しかしながら、設問2～4の集計結果では、上級学年になるにしたがって、コミュニケーションに関する能力は低くなり、自分の思いや考えをもちながら、表現したり、互いに伝え合ったりして、グループの考えを発展させようとする生徒が少なくなることが分かった。これは、生徒たちが気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションをとり、多様な考えや意見をもつ人々によるグループ等で課題を解決することが苦手であったり、回避したりするのではないかと考えられる。このことから、コミュニケーションを深め、グループ活動を活発にするためには、お互いに聴き合う関係づくりをすすめ、人間関係を深めることが大切である。

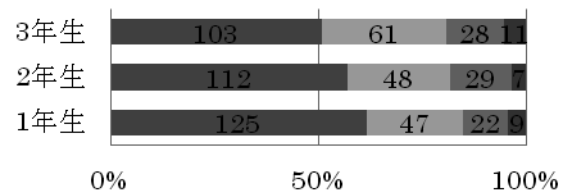
そこで、本分科会では、上級生が下級生の思いや考えに寄り添い、グループの考えを発展させる活動を行えば、上級生の自己肯定感が高まり、自分の意見や考えに自信がもてるようになると考えた。そのことが他者との関わりを深めるようになり、コミュニケーションに関する能力が高まり、豊かな人間関係を築くことができるだろうと考え、異学年によるグループ活動を取り入れた検証授業を行うこととした。

設問1	少人数グループの活動を取り入れると、学級活動に興味もちやすい。
設問2	少人数グループの活動で気楽に友達に聞くことができますか。
設問3	少人数グループの活動で友達から質問されたら、分かりやすく教えることができますか。
設問4	少人数グループの活動で自分の考えをうまく説明することができますか。

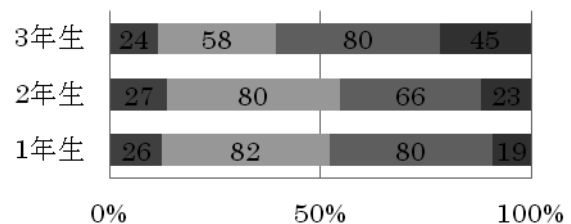
設問1 グループ活動を取り入れると興味もちやすい



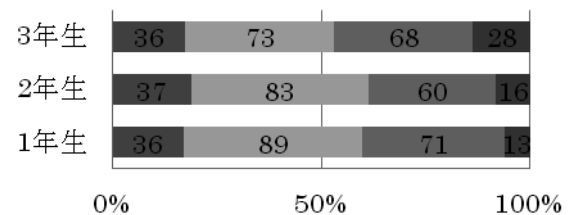
設問2 グループ活動で気楽に聞くことができる



設問3 グループ活動で分かりやすく教えることができる



設問4 グループ活動で自分の考えを説明できる



■ そう思う ■ ややそう思う
■ あまり思わない ■ 思わない

3 学級活動の年間指導計画例（異学年のグループ活動を活用した学級活動）

月	指導項目	内 容
4 月	1 年生を迎える会 (生徒会行事)	異学年の縦割りクラスでガイダンスを行い交流を深める。 上級生が中学校の紹介・生徒会活動・部活動について説明する。 少人数グループ活動の授業の取組について、上級生が目的・方法などを下級生に説明する。
9 月	陸上競技大会 (学校行事)	目的・方法などを上級生が説明する。 異学年の縦割りクラスでスローガンを作成し、実現方法を話し合い活動を行う。 上級生が下級生に朝練・放課後練習などの支援を行う。 異学年の縦割りクラスでお互いに応援をする。 陸上競技大会の反省を行い、上級生に感謝の気持ちを伝えると共に、来年度に向けての気持ちを育む。
10 月	合唱コンクール (学校行事)	目的・方法などを上級生が説明する 異学年の縦割りクラスで話し合い活動を行い、スローガンを作成し、実現方法を考える。 上級生が練習時の支援・練習方法のアドバイスをを行う。 合唱コンクールの反省を行い、上級生に感謝の気持ちを伝えると共に、来年度に向けての気持ちを育む。
11 月	挨拶運動(生徒会行事)	
12 月	募金活動(生徒会行事)	
3 月	3 年生を送る会 (生徒会行事)	3 年生への感謝の気持ちを伝えるための取組

4 検証授業

(1) 活動名 「陸上競技大会を成功させよう」

(2) 活動のねらい

話し合い活動の充実を図ることにより、生徒たちが自分への自信をもって他者や集団との関わりを深めさせ、豊かな人間関係を形成させる。

(3) ねらいに迫るための工夫

ア 言語に関する能力を育むために、話し合いの約束を決め、生徒同士がお互いに安心して自分の意見を発表できるようにする。また、生徒が自分の意見をもちやすいように、興味・関心が高い陸上競技大会のスローガンやその方策について、話し合わせる。

イ コミュニケーションに関する能力を育むために、少人数のグループ活動を取り入れる。また、異学年でのグループ活動を取り入れることにより、上級生が下級生の思いや考えに寄り添った支援をすすめる、豊かな人間関係を育むようにする。

(4) 評価規準

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団や社会の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
学級や学校の生活の充実と向上に関わる問題に関心を持ち、他の生徒と協力して、自主的、自律的に集団活動に取り組もうとしている。	学級や学校の一員としての自己の役割と責任を自覚し、他の生徒の意見を尊重しながら、集団におけるよりよい生活作りなどについて考え、判断し、信頼し支え合って実践している。	充実した集団生活を築くことの意義や、学級や学校の生活作りへの参画の仕方、学級集団として意見をまとめる話し合い活動の仕方などについて理解している。

(5) 活動の過程

	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
事前	・陸上競技大会について知る。	・陸上競技大会への意欲が高まるよう、興味付けを工夫する。	・陸上競技大会について興味・関心を高めている。 【関心・意欲・態度】
本時	・陸上競技大会に向けて、スローガンを考える。	・全員に自分なりの意見をもたせる。 ・個人の意見がスローガンに反映するように、グループ活動を用いる。	・陸上競技大会を成功させようと考えている。 【関心・意欲・態度】 ・お互いの思いを大切にしながら、スローガンを考えることができる。【思考・判断】
事後	・陸上競技大会のために協力して、準備をする。 ・陸上競技大会を振り返る。	・責任を果たすことと協力することの意義が、生徒にも伝わるように配慮する。 ・自分の頑張りと共に、学級内の他者の頑張りも評価し合う。	・友達の良さを認め合いながら、協力して陸上競技大会の準備ができる。【技能・表現】 ・一人ひとりが責任を果たすことの大切さを理解するとともにお互いの頑張り認め合うことができる。 【技能・表現】 【知識・理解】

(6) 本時の指導

ア 本時の活動テーマ 「陸上競技大会のスローガンを作ろう」



イ 本時の評価規準

- ・陸上競技大会を積極的に盛り上げるようなスローガンや、取り組む方法について考えようとしている。【関心・意欲・態度】
- ・相手の思いを大切にしながら、陸上競技大会を成功させるためのスローガンや取り組む方法について考察している。【思考・判断】

ウ 本時のねらい

- ・みんなで協力して陸上競技大会を成功させるために、異学年の縦割りクラスを活用し、スローガンを考え、意欲的に参加しようとする態度を身に付ける。

エ 指導計画

	学習活動	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
導入	1 挨拶 2 本時の説明 3 自己紹介	話し合う目的と内容を示す。 話し合うときの約束を確認する。 1 全員が自分の意見を発表する。 2 発表者の意見を最後まで聴く。 3 発表するときも聴くときも相手の目を見る。 4 人の意見を尊重する。	
展開	1 スローガンの作成 (1)個人の考えをまとめる。 (2)グループの考えをまとめる。 2 取組の方法の考察 ワークシート3 (1)個人の考えをまとめる。 (2)グループの考えをまとめる。 3 ホワイトボードに記入 4 各グループの発表	F組のスローガンを考えよう。 ・司会役を決めて、全員が意見を言えるようにする。 ・話し合いのルールが守られているか、確認する。 ・ワークシートに個人の考えを記入させる。 陸上競技大会を成功させるためにどんな取組ができるか  ・いくつかのグループに発表させ、全体で共有する。	【関心・意欲・態度】 ・陸上競技大会を成功させようとして協力して考えようとしている。 〔観察〕〔ワークシート〕  【思考・判断・実践】 ・互いの良さを生かし合いながら、陸上競技大会を成功させるための具体策を考え、理由を示して意見を説明している。 〔観察〕〔ワークシート〕
まとめ	1 まとめの活動 ワークシート4 2 感想	・みんなの意見を参考にして、F組のスローガンを考察させる。 ・本時の活動を振り返り、感想を記入させる。	

オ 本時の評価規準

- ・陸上競技大会を積極的に盛り上げるようなスローガンや、取り組む方法について考えようとしている。【関心・意欲・態度】
- ・相手の思いを大切にしながら、陸上競技大会を成功させるためのスローガンや取り組む方法について考察している。【思考・判断】

(7) 検証授業の成果

今回の実践事例は、陸上競技大会の取組の一環として行った。陸上競技大会をみんなで協力し、成功させるためにスローガンを考えさせた後、実現に向けて具体的な取り組む方法について考えさせた。異学年の小グループ活動を設定し、上級生が下級生の思いや考えに寄り添って支援を進めさせたところ、上級生はリーダーシップを発揮し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が多く見られた。また、生徒の関心・意欲が高いテーマだったため、多くの生徒が意欲的に話し合い活動に参加することができていた。

生徒が記入した授業の振り返りの中でも、9割以上の生徒が「話し合いに意欲的に参加することができた」と自己評価を行っている。また、「相手の話をよく聴くことができましたか」「自分の意見をすすんで発表することができましたか」の問いに8割以上の生徒ができていたと答え、コミュニケーションに関する能力を育むことにつながった。授業後の実践では、陸上競技大会実行委員が話し合いを行い、『全戦笑凍。最後に笑うのはF組だ』のスローガンを決定することができた。生徒の感想をいくつか記入する。

4. 陸上競技大会のF組のスローガンを決めよう。
みんなの発表で自分が良いと思うスローガンを記入しよう。

☆勝利は燃えろF組

◎今日の授業の感想をまとめよう。

	よくできた	できなかった
① 話し合いに意欲的に参加することができましたか。 [A] [B] [C]		
② 相手の意見をよく聴くことができましたか。 [A] [B] [C]		
③ 自分の意見をすすんで発表することができましたか。 [A] [B] [C]		

【感想】

いつも聞けなかった1年生の意見も聞いてもらって良かった。自分も意見を言えるようになった。来年は、私が下級生にいろいろと教えてあげることができたらいいと思いました。

生徒の感想

- ・下級生と話し合いを行い、上級生としてリードして話し合いをすすめることができて良かった。これからも意欲的に話し合いができるようにしていきたい。
- ・いつもは聞くことができない下級生の意見を取り入れて話し合いができて良かった。またこのような機会があればよいと思った。
- ・司会になり、緊張したけれどもうまく話をまとめることができてよかった。話し合いの成果を生かして1年生と共に、陸上競技大会を成功させたい。
- ・2年生だけでなく、1年生とも絆が深まり、最高の陸上競技大会にしようと思った。
- ・下級生と話合うことは緊張したけれど、一人ひとりが自分の意見を発表することができたので良かった。F組で団結して優勝目指して頑張りたいです。
- ・2年生の話聞いて、陸上競技大会について「頑張ろう」という気持ちが強くなりました。F組のみんなで団結して、スローガンが達成できるようにしていきたいです。
- ・2年生はいろいろな意見を出していてすごいと思いました。2年生が優しくしてくれたので、自分の意見を発表することができました。来年は、私が下級生にいろいろと教えてあげることができたらいいと思いました。

vi 効果検証と本研究からの提言

1 効果検証の概要

研究課題に対する実践を行った結果を考察するために、効果検証を行った。効果検証は授業実践クラス（第二学年34名）で実施した。

2 効果検証の分析と考察

設問1については、約6割の生徒が新しい変化や発見があったと回答している。具体的に、「これまで自分の考えを言えなかったが、下級生に分かってもらえるように分かりやすく説明できた」「自分の考えを伝えるだけでなく、相手の考えも聴くことが大切なことが分かった」等の意見がみられた。

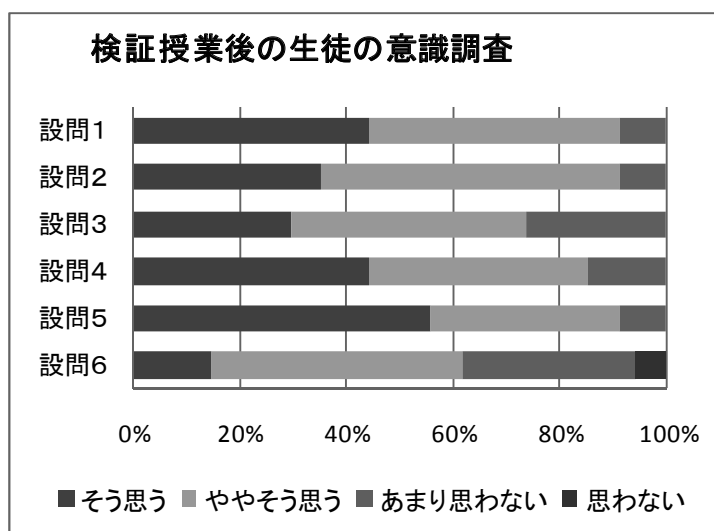
設問2では、約9割の生徒が、意欲が高まったという結果となった。具体的には、「下級生と話をすることで、目標を決め、意欲が高まった」「クラスの中だけでなく、下級生との交流により、団結力が深まって良かったから」などの前向きな意見が多かった。

設問3では約8割の生徒が上級生として下級生に接することができたと回答している。具体的に「下級生に声かけしたり話しやすい雰囲気を作った」など下級生に寄り添った意見が多く見られた。

設問4では、約7割の生徒が安心してコミュニケーションをとることができたと回答している。これは、話し合い活動の約束を授業の前にしたことで、生徒同士が聴き合う関係が築かれていたことやお互いの思いや考えを尊重する姿勢ができていたことが、話し合い活動を意欲的にしていったと考えられる。具体的に「話を聞く態度や、環境が整っていた」「質問をしやすい雰囲気だった」という意見がある一方、「初めてだったので緊張していて黙ってしまいました」「違う学年で話にくかった」「質問がしにくい雰囲気だった」という回答を得ることができた。設問5・6では、約9割の生徒が、相手の話を理解し、相手の立場に立って話をしたり、自分の思いや考えをきちんと伝え合う活動を行うことができている。

これらの効果検証の調査結果と検証授業の成果を受けて、今回の検証授業における研究に迫る手立てによって、人間関係を豊かにするコミュニケーションに関する能力の育成に効果があったと捉えることができる。

設問1	他学年と話し合うことによって自分に新しい変化や発見がありましたか。
設問2	話し合い活動の中で陸上競技大会に向けて意欲が高まりましたか。
設問3	1年生に対して優しく言葉を掛けたり、親切に教えることができましたか
設問4	話し合い活動の中で安心して発表することができましたか
設問5	話し合い活動の中で相手の話を聞いて自分の考えをもつことができましたか
設問6	話し合い活動の中で自分の考えに理由をもち、発表することができましたか



3 本研究からの提言

検証授業の成果及び検証授業後の調査の結果を受けて、研究のねらいに迫る手立てとして有効であった指導の工夫について次のようにまとめ、本研究の提言とする。

(1) 話し合い活動の工夫

ア 言語活動の充実に関する工夫

知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力を育むためには、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動を工夫するなど、言語活動を充実させる学習活動を取り入れることが重要である。検証授業では、陸上競技大会をみんなで協力して成功させるためにスローガンを作成したり、それを実現するための方法について話し合ったり、まとめたりする活動を経験させることにより、思考力・判断力・表現力の育成が図られた。また、司会原稿や発表の方法を提示したことは、生徒が安心して話し合い活動に取り組み、円滑にすすめるために有効であった。

イ コミュニケーションに関する能力を育む工夫

(ア) 異学年の縦割りクラスを活用し、上級生が下級生の思いや考えに寄り添い、グループの考えを発展させるような活動を工夫する必要がある。異学年のグループ活動により、上級生は自分の考えに自信をもって発表することができたり、自己肯定感を高めたりすることにつながった。また、下級生は、上級生から支援を受けたうれしさや心地よさを味わう経験をすることができ、来年への意欲につながるようになった。このことから、異学年の縦割りクラスによる活動は、自分への自信を高め、人間関係が豊かになっていくことにつながっていく。

(イ) 生徒がお互いに聴き合う関係作りを進め、お互いに尊重する姿勢をもつことができるようにする「話し合いの約束」の設定が話し合い活動を充実させるために有効である。

話し合いの約束	
1	全員が自分の意見を発表する
2	発表者の意見を最後まで聴く
3	発表するときも聴くときも相手の目を見る
4	人の意見を尊重する

(ウ) 生徒の興味・関心の高い課題を設定し、生徒が互いにコミュニケーションを深め、グループの考えを発展させようと意欲をもてるようにすることが必要である。関心の高い課題を設定することにより、生徒が自分の思いや考えを発表しようと意欲的に取り組むようになり、さらにグループの考えを発展させようと話し合い活動が深まることにつながった。

(2) 学級活動と生徒会活動や学校行事等との関連を図った年間指導計画の作成

学級活動は、「望ましい人間関係を形成し、一人ひとりの生徒が協力してよりよい生活を築こうと自主的、実践的な態度を育成すること」が目指されている。そこで、生徒の発達段階を意識して、望ましい人間関係を育てるために、異学年の縦割りクラスを活用した学校行事や生徒会行事などと学級活動を関連づけて年間を通して継続的に指導を実施する。

vii 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究では、「人間関係を豊かにするコミュニケーションに関する能力を育てる」ための指導の工夫をねらいとし、基礎研究・調査研究に基づいて検討した「ねらいに迫る手立て」について、実践研究を通してその有効性を確かめた。その研究の成果を次の通りまとめることができた。

(1) 調査研究により、生徒のコミュニケーションに関する能力について把握した。

少人数のグループ活動を中心とした活動では、課題に対する生徒の興味や関心が高まりやすいことが分かった。また、発達段階により、上級学年になるにしたがってコミュニケーションに関する能力が低くなり、自分の考えや思いをもちながら、互いに伝えたり、グループの考えを発展させようとしたりする生徒が少ないという課題を把握できた。

(2) コミュニケーションに関する能力を育てる指導の在り方を示すことができた。

ア 学級活動の年間指導計画（異学年のグループ活動を活用した学級活動）の作成

イ 学級活動の指導の工夫

(3) 実践研究で、言語活動を意図的・計画的に授業活動に取り入れることにより、思考力・判断力・表現力等の育成が図られ、コミュニケーションに関する能力が育まれるようになった。そして、そのことにより、生徒が自分に自信をもつようになり、自己肯定感が高まった結果、豊かな人間関係を築いていくことにつながることが分かった。

2 今後の課題

より良い学校生活を築くためには、多様なコミュニケーションに関する能力を身に付け、豊かな人間関係を育てていく必要がある。しかし、自分に自信がもてず自己肯定感が低いため、人間関係に不安をもっている生徒が多いという現状がある。そこで、本研究では、異学年の縦割り活動による言語活動の充実を図り、コミュニケーションに関する能力の向上を目指す指導方法の工夫を提案した。本研究の成果としては、自己肯定感を高め、生徒同士のコミュニケーションの充実を図る工夫をすることで、豊かな人間関係を目指すことができたが、今後、より一層の充実を図るには、学級活動をはじめとする特別活動だけでなく、各教科や道徳、部活動等へも同様の活動を広げていくことができるように、学級や学年の枠を越え、学校全体で組織的にコミュニケーションの充実を図る必要がある。

IV 両分科会の研究を通して

本部会では、「コミュニケーション」をキーワードに、小学校分科会、中学校分科会はそれぞれ異なる視点から研究に取り組んだ。「生きる力」を育み、子供たちのより良い育ちを図るための指導方法の工夫を提案するとともに、教師による子供への働き掛けの効果を担保する若手教員の組織的な育成の仕組みについて提案をするものである。

今回の研究を通して、この二つの面を合わせて考えていくことが、効果的な教育活動を展開していくために求められていることに、改めて気付かされた。今後も、本研究により明らかにされた課題の解決に継続して取り組んでいきたい。

平成25年度 教育研究員名簿

小中合同 ・ 教育課題

	地区	学 校 名	職名	氏名
小学校分科会	文京区	小日向台町小学校	主幹教諭	○河口 和彦
	江東区	第五砂町小学校	主任教諭	田代 雅秀
	府中市	小柳小学校	教諭	蔦谷明日人
	府中市	新町小学校	主任教諭	○大山 章博
	府中市	小柳小学校	教諭	和田 邦雄
	東久留米市	第七小学校	主幹教諭	宮崎 貴仁
	武蔵村山市	第二小学校	主任教諭	田中 暁
	西東京市	田無小学校	主任教諭	畑 大介
	西東京市	けやき小学校	主任教諭	庄司 哲也
中学校分科会	江東区	深川第五中学校	教諭	船崎紗矢香
	小平市	小平第二中学校	主幹教諭	○木原 賢三
	府中市	府中第五中学校	主任教諭	小暮 敦
	東村山市	東村山第五中学校	主任教諭	鈴木 篤志

○ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事 福田 忠 春

平成25年度
教育研究員研究報告書

小・中学校・教育課題

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成25年度第193号〕

平成26年 3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 昭和商事株式会社